

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：32616

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02607

研究課題名(和文) 国際ペンクラブと世界文学史の相関 日中印外交と英連邦史、欧州史

研究課題名(英文) The inter-relation of the international P.E.N. and literary history of the world: Japan-China-India diplomacy and history of the British commonwealth and Europe

研究代表者

目野 由希 (MENO, YUKI)

国土館大学・体育学部・准教授

研究者番号：20338289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：2016年度はハイデラバード英語外国語大学タリク・シェーク招聘。江口眞規を大英図書館調査に派遣。2017年度、モハンマド・モインウッディンと岡和田晃を調査で印派遣。日印友好交流年事業の日印文学研究国際会議に参加、日本大使館員や国際交流基金職員、デリー大学教員や院生と交流。目野は9月「1954年ロンドンにおける亡命ペン作家作品集刊行に至るまでの国際ペンクラブ・ロンドン本部と欧州史」発表。2018年夏、タリクBL調査。先の東京研究発表をBLで講演。9月、EFLUでセミナー開催。2019年1月、国際研究集会。3月、目野が「戦前期日本ペン倶楽部と戦前期中国ペン倶楽部」発表。3月、鼎書房より成果刊行。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1935年の国際連盟脱退後、外務省が対外文化政策の一環として日本ペン倶楽部を組織したが、インドや中国、イギリスやイタリアなど世界各国と、特異で複雑な文化外交を執行しようと試み、挫折する過程を調査した。新事実の発見や日本の対外文化政策が戦後も反復し続ける失策の原型が判明した上、この共同研究が現代の日印学術交流を促進し、BLでの講演やインドの国立大の日本研究セミナーに発展するなど、多面的な成果が得られた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we cross-check the primary documents of the Japan Pen Club and the India Pen Club in England and India in the 1930s and examine the foreign cultural diplomacy of pen clubs in Japan, China, India and England at the time of the formation of the British Commonwealth. As a result, (1) the cultural structure of literary and linguistic activities of each country after the Second World War was already established through pen club activities at this time, (2) the magnitude of the influence of the Indian pen club since the 1930s has been forgotten in each country since the 1950s, (3) the understanding of the history of literature in Japan, China, and England has become insufficient, and (4) the competition to nominate candidates for the Nobel Prize in Literature up to the 1960s has tended to be considered without the influence of the Indian pen club. The results were published in March by Kanae Shobo as 'Study of the Japan Pen Club and the prewar Japan Pen Club'.

研究分野：日本近代文学、比較文学

キーワード：戦前期日本ペン倶楽部 日印交流史 イギリス連邦史 日中印関係史 国際ペンクラブ インドペンクラブ 日本近代文学史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦前期日本ペン倶楽部の設立とその渉外活動は、わが国が国際連盟から脱退し、世界的に孤立した後の国際文化外交、特に英連邦中心の世界秩序に基づく列強への渉外活動という、特異な外交政策である。しかし、これまで本件は、一次資料に基づいて調査されたことはなかった。本件は日本文学や文化の研究のみならず、政治学や日印交流史などの研究事案でもある。主たる一次資料の収集は 2012 年頃までに終わっていたものの、クロスチェックが終わっていないので、資料の合理的な検討や一般公開が難しい状況にあった。そこで、今回のような共同研究がなされることとなった。

2. 研究の目的

戦前期日本ペン倶楽部と各国ペンクラブ、そして国際ペンクラブ・ロンドン本部の関係について、別の科研費「戦前期日本ペン倶楽部の研究-日印文化交流と国際文化政策」(研究課題番号: 22320043、研究種目: 基盤研究(B))で複写・筆写・購入等の手段で入手してきた一次資料のクロスチェックを三年かけて行い、本件の正確な事実関係を明らかにする。そして、その結果を一般公開するとともに、日印の学术交流を同時に促進する。

3. 研究の方法

戦前期日本ペン倶楽部と各国ペンクラブ、そして国際ペンクラブ・ロンドン本部関係資料をあたって一次資料とのクロスチェックを続ける。並行して、海外との学术交流を深める。

2016 年度は、まず 2016 年 7 月 16 日土曜日に第一回研究会(於 国土館大学中央図書館・情報メディアセンターグループスタディ室 E)を行い、調査出張先検討などの打合せを行った。

次に 16 年 10 月 22 日土曜日にも研究会(於 国土館大学世田谷キャンパス中央図書館・情報メディアセンターグループスタディ室 E)を行った。

2017 年 1 月 28 日土曜日には、インド・ハイデラバードから、ハイデラバード英語外国語大学のタリク・シェーク助教授を招聘し、インド側の史資料に基づく一次資料クロスチェックの成果発表がなされた(於 東京外国語大学本郷サテライト 3 階セミナー室)。

ここまでのインド側からのクロスチェックの成果は目覚ましいものがあり、研究会では、このタリク・シェーク発表は改めて英語圏でなされるべきという結論にいたった。その件は、2008 年に実現した。

また、共同研究者の江口眞規に依頼し、2017 年 2 月 8 日から 2 月 23 日、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリーでの一次資料クロスチェック業務に従事してもらった。この時点でも、単なるペン倶楽部資料のクロスチェックにとどまらない、多面的な成果が得られた。

2017 年度には、モハンマド・モインウッディンおよび岡和田晃の共同研究者 2 名を、デリーに派遣して史資料調査を依頼した。このインド出張の日程が、ちょうど日印友好交流年のイベントであるデリー大学・ネール大学の日印文学研究のカンファレンスの 9 月 16 日前後と重なった。そのため、彼らはここに参加でき、在インド日本大使館書記官や国際交流基金職員、デリー大学教員や大学院生たちと、講演活動を中心とする学术交流を行えた。この年も研究会を主催し、関西大学の増田周子に口頭発表を依頼するなど、国内での研究会も進捗した。

2018 年 7 月から 8 月には、タリク・シェークに依頼して、ブリティッシュ・ライブラリーでの一次資料クロスチェック調査に派遣した。この時、彼は 2017 年 1 月の東京での口頭発表について、ライブラリー内で学術講演をしてきた(科研費番号は現地配布資料に提示あり)。

2018 年 9 月には、目野が評論家の夏葉薫を伴ってハイデラバード英語外国語大学に出張。本件共同研究の成果について、セミナーを行って学生・教員間で成果を共有し、質疑を受けた(日本語)。

2019 年 1 月 27 日に、東京外国語大学本郷サテライトで、タリク・シェーク(インド)ほかを招いて国際研究集会を行った(使用言語は英語)。

4. 研究成果

第一に、一次資料のクロスチェックの成果を、2019 年 3 月に単著として刊行し、研究成果を一般公開できたことである。

次に、一次資料のクロスチェックの成果を、2019 年 3 月に学会発表できたことである。

本研究会の場合、並行して行われた日印の学术交流の成果が予想以上に大きかった。たとえば、2017 年 9 月のデリー大学・ネール大学の日印文学研究のカンファレンスに岡和田晃を派遣した際には、同大学に日本で評論活動を行っている研究者が最後に来たのが 20 年以上昔である上、この先にもめったにない機会であるとして大いに歓迎され、本研究以外の講演活動も依頼された。

さらに、2018 年 7 月 24 日から 8 月 8 日までタリク・シェークをロンドンのブリティッシュ・ライブラリーに派遣した際、「The History of the P.E.N. in Pre-independence India」という標題で講演会まですることになった。ここでの反応がとてもよかったので、ほぼ英語を母語

同然に話すタリク・シェークが英語圏で話をする方が、研究代表者が英語圏での発表を行うより伝わりやすく、かつ、より多くの聴衆に話をして、高レベルな質問から庶民的な質問まで、流暢に応答できたことは大きかった。

これらは「講演」であるので、学会発表の回数には含まない。

また、2018年9月にインド・ハイデラバードで行った本件成果セミナーも好評だった。それと同時に、共同研究者の夏葉薫が学生とのコミュニケーションや指導に抜群に優れており、インドの国立大学の日本学科を活性化するのに大いに役立った。

最終年度の国際研究集会では、スカイプ経由で CELIA DE ALDAMA ORDOÑEZ（チェコ在住のスペイン人研究者）の参加を仰ぎ、中里成章（東京大学名誉教授）や青木健（静岡文化芸術大学教授）の協力もあって、英語で行われた。本件は当日の飛び入り参加者もあるほどの盛会となり、またスペイン人研究者との国際的な連携もできて、研究会の最後は大きな広がりをもって終わった。

期間中、別記の学会発表を2回行った（研究集会とあるが、査読付きの学会発表）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

目野由希「島崎藤村と対インド日本文化外交の挫折：戦前期日本ペンクラブによる日印交流史」『文学研究論集』(36号、2018年3月、筑波大学比較・理論文学会、査読付き)

他に、ワーキングペーパーを出した。

1. 目野由希「The History of Indian PEN club in pre-War Period」『Working paper 2019』(2019年3月、国士舘大学アジア・日本研究センター)

〔学会発表〕(計 2 件)

目野由希「1954年ロンドンにおける亡命ペン作家作品集刊行に至るまでの国際ペンクラブ・ロンドン本部と欧州史」(2017年9月24日、第7回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会、於同志社大学)

目野由希「戦前期日本ペンクラブと戦前期中国ペンクラブ」(2019年3月8日、第10回世界文学・語圏横断ネットワーク研究集会、於津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス)

「講演」は別記の通り、共同研究者が複数回行った。

〔図書〕(計 1 件)

目野由希『日本ペンクラブと戦争 戦前期日本ペンクラブの研究』(鼎書房、2019)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：藤井毅

ローマ字氏名： Fujii Takeshi

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：大学院総合国際学研究院

職名：教授

研究者番号（8桁）：20199285

(2)研究協力者

研究協力者氏名：青木健、江口真規、岡和田晃、夏葉薫、西成彦、モハンマド・モインウッディン、タリク・シェーク

ローマ字氏名：Ken AOKI, Maki EGUCHI, Akira OKAWADA, KaoIu NATUBA, Mohammad Moinuddin, Tariq Sheikh

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。